

17. 運動負荷 ^{201}Tl 心筋 SPECT にて逆再分布現象を示した肥大型心筋症の2例

三原 信 田原 隆 工藤 祥
岸川 高 (佐賀医大・放)
松尾 修三 (同・循内)

肥大型心筋症症例2例において、運動負荷 ^{201}Tl 心筋 SPECT にて逆再分布現象がみられたので、その出現機序を考察し報告した。2例とも心エコー、心MRIにて左室壁の対称性肥大があり、冠動脈造影では異常なく、左室造影にて拡張期スペード様所見を認めた。運動負荷 ^{201}Tl 心筋 SPECT の結果、症例1(42歳女性)では、前壁および下壁から後壁に不可逆的灌流低下を、側壁に逆再分布現象を認めた。症例2(56歳男性)では、前壁・中隔および側壁に逆再分布現象を認めた。Washout rate は、2例とも広範に低下していたが、逆再分布現象のみられた部位では、比較的良好に保たれていた。

18. 著明な低酸素血症を伴った肝硬変症——肺血流シンチグラフィによる経過観察——

坂田 博道 小野 庸 (福大・放)
司城 博志 奥村 恵 (同・一内)

肺血流シンチグラフィで経過観察を行った著明な低酸素血症を伴う肝硬変症の1例を報告した。症例は58歳、男性。昭和63年1月呼吸困難および肝硬変症の精査目的で入院した。PaO₂は44 mmHgと著明に低下し、プロスタグランジン E₂が10 pg/ml(8.4以下)と軽度上昇していた。 $^{99m}\text{Tc-MAA}$ 肺血流シンチによるシャント率は61%であった。インテパン(プロスタグランジン E₂合成阻害剤)投与後のシャント率は55%(PaO₂ 50 mmHg)と軽度改善した。平成2年10月 PaO₂ 39 mmHg、シャント率68%と悪化し、肝細胞癌に対するTAE後それぞれ22 mmHg、77%となり、保存的療法により平成2年12月には38 mmHg、63%に改善した。

$^{99m}\text{Tc-MAA}$ 肺血流シンチは低酸素血症を伴う肝硬変症の経過観察に有用であった。

19. 肝移植後の $^{99m}\text{Tc-PMT}$ 胆道シンチグラフィによる肝機能の評価

大山 洋一 富口 静二 鍋島 光子
木下 留美 原 正史 古嶋 昭博
高橋 瞳正 (熊本大・放)
世良 好史 永瀬 浩喜 (同・二外)

肝移植後の肝機能評価を目的に $^{99m}\text{Tc-PMT}$ 胆道シンチグラフィを施行した。症例は先天性胆道閉鎖症の1歳男児および1歳女児の2例で、男児は初回生体肝移植施行するも慢性拒絶反応のため再度死体肝移植を受けた。肝機能の定量評価のために心臓および肝の時間・放射能曲線を2コンパートメント解析し、定量的指標である血中早期消失率、血中後期消失率、肝摂取率、肝代謝率を算出した。慢性拒絶反応では拒絶反応を認めない肝に比べ血中後期消失率、肝代謝率の低下を認め、胆道シンチグラフィは術後の拒絶反応などによる肝機能障害の評価に有用と思われた。

20. CRによるPRLの分子的多様性の解析

大浪 俊平 栄 文也 小川 治久
黒田 環 (産業医大・放部)
塩崎 宏 中田 肇 (同・放科)

SDS-PAGE および標識 PRL モノクローナル抗体を用いて分離した PRL の分子形態を、CR のイメージングプレート(IP)を用いたオートラジオグラフィにより解析した。

正常ヒト下垂体抽出物のPRL放射活性の主なバンドは23 kと25 kに認め、弱いバンドを46 kに、さらに弱いバンドを50 kに認めた。これに対してPRL産生下垂体腫瘍抽出物では、上記バンドの他に37 k付近にPRL放射活性を認めた。また本法は、従来のX線フィルムによるオートラジオグラフィに比較して、露光時間の短縮、低濃度の定性が可能となり、さらにRIによるバックグラウンドの影響もなく、各PRL分子の描出もより鮮明であった。